

シンギュラリティ

主な登場人物 老婆

青年

研究員

カタギリ

エミリー

作 宝井 直人

(人工的な広い荒野。車いすに佇む老婆。そこへ無機質な表情をした青年がやってくる。)

老婆 ……待っていたわ。

青年 いえ……ここは。

老婆 墓場よ

青年 ……そうですか。

老婆 君の「夢」に出てくる少女について。知っていることを全て話す。

青年 あの夢は、彼女は一体なんなんですか。

老婆 彼女の名前は「エミリー・ヒイズル」。私と同じ研究所にいたカタギリの姪。

青年 ……エミリー

老婆 30年以上昔の話、私はロボットビジネスの大手企業の研究員として、ロボットの研究に人生を捧げていた。カタギリとはそこで出会った。

青年 そうだったんですね。

老婆 同じ穴のムジナ。彼もまた、私と同様、ロボットの研究に人生を注いでいた。カタギリも研究以外何もない奴だと思っていた。でも、そうではなかった。彼には「エミリー」という存在があったんだ。

青年 エミリー

老婆 エミリーはカタギリの姉の娘。エミリーが思春期を迎える頃、彼女の両親は病に犯されこの世を去った。決して治療できない病気ではなかったけどね。

青年 なぜ、助からなかったのですか？

老婆 お金よ。治療するためのお金が用意できなかったの。人生を2回繰り返すほどのね。

青年 そうですか。

老婆 その後、彼女はカタギリに引き取られることになった。カタギリは親の代わりのように面倒を見ていた。すごく礼儀正しくて大人しい子だった。カタギリに似て、口数も少なかったけどね。

青年 ・ ・ ・

老婆 二人は本当に親子のようだった。でも、それから数年後、彼女は不幸に巻き込まれ、この世を去った。

青年 そうですか。

老婆 不幸の知らせが届いた夜、カタギリは一人研究室でうなだれていた。彼はひどくやつれていたわ。普段感情を表に出すような奴じゃ無かったから、余計にそう感じた。

(時は遡り、老婆の回想。とある研究室、生気を失い佇む男性。その男性に向かって女性が語り掛ける)

研究員 カタギリ・・・

カタギリ ……俺は、お前のように、ロボットへの情熱はないんだ。

研究員 ……そう。

カタギリ 俺さ、エミリーが生まれた時、病室で抱っこしたことがあるんだ・・・生まれたての赤ちゃんってさ、宇宙人みたいな顔してるんだよ。でもさ、すっごい可愛かった。その時思ってたんだ。この子には幸せになって欲しいって、そう思った・・・変だよ俺(笑) 自分の子じゃないのに。

研究員 ……今日はやけにおしゃべりね。

カタギリ ……一度でいい、もう一度・・・今はそう思うよ。

研究員 ……カタギリ

(過去の思い出を穏やかに語る老婆)

老婆 その時の彼を見て、胸に来るものはあった。でも私は、彼を利用した。

青年 どう言う意味です。

老婆 これまでの研究で、人間の心には「記憶」と「感情」が大きく作用していると考えていた。作り物ではダメだったの。だから、本物の記憶を使えば何かわかるかもしれない・・・それで利用したの。

(再び時は遡り。)

研究員 死んだ人間は生き返らない・・・でも会える。

カタギリ・・・。

研究員 彼女の記憶を使うんだ。

カタギリ・・・

研究員 彼女は死んだ。でも記憶を取り出すことができれば、あるいは

カタギリ そんなこと・・・できるわけないだろ。

研究員 エミリーは作れる。

カタギリ やめてくれ。

研究員 カタギリ、もう一度、エミリーに会おう。

(男性の反応を見て。笑みをこぼすがグッと堪える女性。)

老婆・・・それから程なくして私たちは完成させた。自分を人間だと疑わない完全ロボットを。

青年・・・カタギリ博士はどうされたんですか。

老婆 彼女が初めて目覚めた夜、彼は私たちの前から姿を消した・・・今ならわかる気がする。

青年 そうですか。

老婆 彼女は完璧だった。彼女には心が芽生えていたんだ。私は彼女を研究室に閉じ込め、ありとあらゆることを実験した。次第に、彼女は実験を拒むようになった。

(回想。そこには若い娘と女性研究員。)

エミリー 何なんですか。一体いつになったらここから出られるんですか。

研究員 ごめんなさい。検査が終わるまで答えられないわ。

エミリー 早くここから出してよ。おじさんに会わせてよ。

(穏やかに語る老婆)

老婆 心は痛まなかった、だって、相手はロボットだから。でもね、彼女を見てると心があるんじゃないのかと思っただの。なぜ他のロボットではなく、彼女に心を感じたのか、何故なのか。だから私は、彼女の記憶を書き換えることで心が無くなるのか確認した。でも、彼女の心は消えなかった。何度記憶を書き換えても結果は同じだった。

青年 その後、彼女は。

老婆 処分したわ。一定の成果が得られたら、速やかに処分する。そう決まっていたから。処分する前に、私は彼女へ真実を告げたの。

(回想)

研究員 あなたは本当のエミリーじゃないの。

エミリー ……え？

研究員 エミリーは4年前に死んだの。

エミリー ？何言ってるんですか？

研究員 あなたは「エミリー・ヒイズル」の記憶を元に作られた、ロボットなの。

エミリー 嘘よ！だって、だってあたしここにいるのよ！そうよ！早くここを出て勉強しなきゃ！

研究員 嘘じゃないわ。本当よ。

エミリー そんなの嘘よ！私はエミリー。エミリー・ヒイズル！私には夢があるの！医者になって、母さんや父さんと同じ病気で苦しんでる人たちを治してあげるの！そして言っちゃいたいのよ！「お金はいらない」って！…だから、早くここを出て、私は医者にならなくちゃいけないの！

研究員 ……なれないの。あなたは、医者になることはできないの。本当のエミリーは、この世にいないから。

(回想終わり)

老婆　彼女は、最後まで自分がロボットであることは認めなかった・・・彼女を処分した後、考えたの。死んだ人間の心はどこに帰るのだろうって。エミリーは一度死んだ。でも、確かに彼女にはエミリーの心が宿っていた・・・心に帰るべき場所があるとするのなら、彼女の心はちゃんと帰ることができたのか。

青年　・・・科学者から出る言葉とは思えませんね。

老婆　ただの人殺し。だからやめたの。

青年　何故、やめたのですか？

老婆　自分の中の何かが囁いたの。これ以上繰り返してはいけないって。・・・彼女のおかげで、初めて自分の心に気が付けた気がする・・・私が彼女について知っていることはこれで全てよ。

青年　ありがとうございます。

老婆　この話、カタギリに話せていないの。だから、伝えてくれないかしら。

青年　・・・ご自身の口からお伝えてください。

老婆　そう。

青年　・・・もしかしてここの墓は

老婆 私がこれまで手にかけてきたロボット達よ。覚えている限りの、ね。

青年 ……この下に。

老婆 ここには誰もいないわ。

青年 ……罪滅ぼしですか。

老婆 そうよ。そして、カタギリが作ったあなたに話すことで、懺悔した気になって、救われようとしている。

青年 ……なぜ、彼女は私の夢に出てくるのですか？

老婆 ごめんなさい。わからないわ。

青年 そうですか。

老婆 でもなぜ、カタギリが、あなたを私に合わせたのか、わかった気がする。

青年 どういうことですか？

老婆 ……気がしただけ。

青年 そうですか

老婆 彼から何か言伝を頼まれたんじゃないの？

青年
はい・・・でも、気が変わりました。本人の口から伝えてい頂こうと思います。

老婆
・・・そう・・・不思議ね・・・まるで人間と話しているよう・・・あの日以来、あなた達ロボットは、限りなく人間へ近づいた。一方、私達人間は、体を機械に委ねることで、あなた達ロボットに近づいている・・・私の体の半分はあなた達と同じ・・・人間とロボット、そこにあった境界線は消えつつあるのかもしれないわね。

青年
・・・私に、心はあるのでしょうか。

老婆
わからない・・・でも、心には「器に宿る」だけの力はあった。それが心の持つ力なのか、世の理なのか、果ては宇宙によるものなのか、私にはわからない・・・たぶんきつと心には、私たちの想像が及ばない、とても不思議な力が働いている気がする・・・きつと、あなたにもソレがあると思うわ。

おわり